

行田での思い出

行田邦子市長（以下「市長」） 本日は、行田市

栄誉賞第1号の江利川毅さんについて、多くの市民の皆さまに知っていただけるよう、このような対談の場を設けさせていただきました。

さっそくですが、江利川さんは行田市のご出身ということで、行田での思い出などお聞かせいただければと思います。

江利川毅さん（以下「江利川」） 東小6年生のときに、助け合い作文コンクールで埼玉県知事賞をいただきました。担任の先生からアドバイスをもらいながら、障害のあるクラスメートとの交流を書いたものです。父に連れられて、名誉市民の大澤龍次郎さんにご挨拶に行きましたら、お祝いに、厚さ10センチくらいある広辞苑をいただきました。父から助言されて、その広辞苑に担任の先生に記念の言葉を書いていただきました。『広い地球の中で、長い歴史の流れの中で、君という人間はただ独り。自分を大切に、自分を生かして』。とても感銘を受けました。その広辞苑は今でも大切にしています。高校、大学、社会人と、それぞれの時期にいるいろいろな壁にぶつかるのですが、先生からいただいた

たその言葉に何度も励まされました。

市長 子どもの頃にいただいて忘れられない言葉、自分の後の人生の支えになる言葉がありますよね。

東小学校のご出身ということですが、先日、東小の子どもたちと能登半島応援給食と一緒に食べました。江利川さんの後輩たちは可愛らしくすすすす育っていました。中学校は長野中学校でいらっしゃいますよね。

江利川 長中の校歌に「麦の穂の夢」という歌詞があります。主食の「米Ⅱ稻」でなくてなぜ麦なのか、疑問に思い先生に質問しました。先生は「麦は、麦踏みで何度踏まれても、負けずにすすすす育っていく。困難に負けずに真つすぐ育って欲しい、そういう願いが込められている」と話してくれました。今でも、いい校歌だと思っています。

中学2年生のときですが、同じクラスに、少し不良っぽいけど本当は悪くない、そんな人が2人いました。2人を我が家と呼んで一緒に勉強しました。2人ともぐんぐん伸びました。2学期の期末テストでそのうちの1人に私が抜か



れてしまいました。彼は非常に喜んでいましたし、自信もつけたと思うのです。もう一人は、3年生の1学期の通信簿でオール5を取ったと報告にきました。彼は家が貧しかったため中卒で就職しました。やるせない思いがしました。**市長** ちょっとしたことで子どもものやる気は変わりますし、それが後々にも影響していきますから、学校教育は大変重要です。江利川さんは、学校の優等生だったにもかかわらず、自分と境遇や家庭環境が違う子とも一緒に勉強されたんですね。

学級委員や生徒会長などをされるタイプだったのでしょうか。

江利川 私は学級委員も生徒会長もやりまし

た。運動でも勉強でもみんなの手下になろうと、何にでも意欲的に取り組みました。鉄棒や縄跳び、マラソンが得意でした。でも、軟式テニス部にいたのですが、県体には出場できませんでした。運動では残念な思い出の方が多いです。

厚生省時代のエピソード

市長 その後熊谷高校、東京大学法学部への進学、そして、当時の厚生省に入省されました。その頃の思い出などいかがでしょうか。

また、厚生省では、介護保険制度の創設にも大変ご尽力されたと思っています。当時いろいろ議論もあったと思いますが、ご高齢の方が安心して暮らせるのは介護保険制度があるからだと実感しています。この介護保険制度の創設のきっかけは何かあったのでしょうか。

江利川 大学生だった昭和40年代前半は高度経済成長時代で、一方で公害問題が深刻になっていました。公害問題に取り組みもうと思い、公害部のある厚生省に入りました。幸い、公害担当部局に配属され、本邦初の産業廃棄物の規制を担当することになりました。初めての規制です

から、事業所管官庁は緩い規制を望みます。規制基準を巡って何カ月も交渉が続きました。議論を重ねて、それなりに厳しい基準を設定できたと思っています。この過程でいろいろな省庁の人たちと信頼関係ができ、いい経験をしました。

私は、公害問題が深刻になったのは、規制官庁である厚生省の対応が不十分だったからではないかと思っています。入省して、厚生省の人たちも頑張っていることを知りましたが、まだ不十分。私は「後輩の存在意義は先輩を乗り越えることにある」と自分を叱咤（しっぺ）激励して頑張りました。この思いは、国家公務員を辞めるまで、ずっと持ち続けてきました。私の姿勢の背骨のようなものです。

介護保険制度ですが、介護保険制度ができる前は、利用できる施設は福祉施設である老人ホームに入所するか、病院に入院するしかありませんでした。福祉施設は措置制度で低所得者しか入れませんし、病気でなければ入院できません。要介護や認知症の高齢者を抱える一般の家庭は大変で、悲惨な事件もたくさんあり

ました。

当時から将来の急速な高齢化が見込まれていたため、厚生省は省内にプロジェクトチームを作って検討を進めていました。私は当時他の制度改正などに携わっていました。

検討が進んで、介護保険法案を国会に提出するころ、厚生省で大きな不祥事が起こり、担当者が離職することになりました。そこで、急遽、私が高齢者介護対策本部事務局長に任命され、小泉厚生大臣の下で、介護保険法案の国会審議を担当することになりました。当時は、医療関係者も福祉関係者も斜に構えている感じが

